Osaka University Knowledge Archive

Title	世を倦じ山と人はいふ : 喜撰歌と八の宮をめぐって
Author(s)	荒木, 浩
Citation	詞林. 2009, 45, p. 15-28
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67594
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

世を倦じ山と人はいふ

――喜撰歌と八の宮をめぐって――

荒木　浩

一、はじめに

きわめて個人的な事情ではあるが、『徒然草』の表現分析や、源信伝の読解などを通じて、関心の集約点の一つに『源氏物語』宇治十帖があった。[1] それはまた『古事談』『続古事談』の注釈作業（川端善明・荒木浩共著・校注『新日本古典文学大系41　古事談　続古事談』二〇〇五年十一月）から得た知見と結び付き、一連の『源氏物語』論の試み[2]のなかで、宇治八の宮の准拠としての敦実親王比定説としても展開した。[3] 本稿は、如上の研究脈絡において、直接的には敦実親王准拠論を考察する過程で派生した、「世をうぢ山」の解釈をめぐる、いわば贅注としての研究ノートである。

二、八の宮と類音連想

たとえば、これまで准拠として比定されてきた応神皇子菟道稚郎子（『花鳥余情』以下）や文徳皇子惟喬（宣長『源氏物語玉の小櫛』）などには、それぞれ宇治という場や皇位継承への挫折など、注意すべき宇治八の宮との一致点がある。物語読解には、多様なコンテクストへの理解と視野が必要であり、狭い意味でのモデル論に陥るべきではない、という見解（浅尾広良「八の宮の准拠」室伏信助監修、上原作和編集『人物で読む源氏物語　匂宮・八宮』勉誠出版、二〇〇六年など参照）もよく分かる。しかし、それでもあえて、敦実親王という固有名を新たに提出し、宇治八の宮の准拠に比定して物語を読んでみようと考える最大の理由は、彼もまた、他ならぬ〈八の宮〉だということである。それを可視的なメルクマークとして、音楽や皇位をめぐる状況において、両者は意想外の類似性を見せ始める。その詳細は、すべて注3所掲の拙稿「『源氏物語』宇治八の宮再読―敦実親王准拠説とその意義―」の参照を乞うて、ここでは割愛するが、しかしそうしたことについて、研究史上、これまで目立った指摘が成されることはなかったようだ。むしろその逆に、重要な先行研究において、適切な「八の宮」などは不要であるとして、そのことの意義が排除的に説明されようとすることさえあったのである。

彼の排行が八宮でなければならない必然性はかならずしもない。光源氏の弟で、すでに五宮までは既往の物語に見えること。冷泉院の兄でなければならないこと。そして、その冷泉院を十皇子としたのは、これまたおそらく作者の十の名数操作…によるものであろうから、残りの六・七・八・九中からあえて「八」を作者が選んだのは、ハヂ＝恥＝八、の同音連想によるであろう。（木船重昭「宇治八宮の創造と造型―源氏物語の表現と方法―」『国語と国文学』一九七六年一〇月）

「彼の排行が八宮でなければならない必然性」こそが重要な比定理由であると考える私は右のような理解をとらないし、その必要もない。だが一方で、木船論の当該部には興味深い着眼点も存している。それは、八の宮の名称の根拠に、「同音類想」を想定している点である。

敦実親王は宇多天皇第八皇子で、〈宇多八の宮〉である。音の連想、という視点は、木船論の目論見とはべつのところで、「宇治八の宮」と「宇多八の宮」との間の音韻的な近さにあらためて気付かせる。「同音」ではないが、そこには「うぢ」と「うだ」と、「だ」・「ぢ」の同行音の違いがあるばかりという、類音連想が存在するのである。しかし、そのことが真に意味を持つためには、相応の解釈過程を要する、と思う。本稿では、そのあたりの事情をめぐって、以下、いくつかのことを考察してみたい。

三、「世をうぢ山」再読

宇治の地に隠遁する八の宮は、次の和歌を詠んでいる。

あと絶えて心すむとはなけれども世をうぢ山に宿をこそかれ（『源氏物語』橋姫巻、引用は古典集成）

この歌が、喜撰法師の著名な和歌を本歌とすることは、従来の指摘通りで議論の余地がない。

わがいほはみやこのたつみしかぞすむ世をうぢ山と人はいふなり（『古今和歌集』序、同巻十八雑歌下・九八三、『百人一首』八ほか）

ここであらためて問題としたいのは、両歌に共通する「世をうぢ山」の解釈である。喜撰法師の歌については伝統的に、「「世をうぢ」の「うぢ」とは、「憂」しと「宇」治をかけている」（島津忠夫訳注『新版　百人一首』角川ソフィア文庫、一九九九年）とされ、「憂し」という形容詞の語幹部分と「宇治」の語頭音との掛詞として解かれてきた。[4]

わが庵は都の辰巳。然ぞ住む。宇治山」と人は言ふなり。

「世を憂」→

（竹岡正夫『古今和歌集全評釈』）

右哥はうち山と云うのち[ヲ]をうきといふち[ヲ]によせてよめる也（上條彰次編著『百人一首古注釈『色紙和歌』本文と研究』新典社叢書）

世憂山と人はきらへども我は住得たりと云心也（「経厚抄」）

山の名が宇治なれば、世を憂とてこゝにすむやと人のおもわんと也（「天理本聞書」）

しかし近年、独自の着眼点で先行研究を再読した舩城俊太郎氏によって、注意すべき問題提起がなされている。舩城氏は、「世を憂がる宇治山だと」本句を解釈する小西甚一『新註国文学叢書　古今和歌集』などを引き、「比較的最近に「う」を動詞の語幹としていると思われる考え方も現れてきた」と指摘し、次のように述べていくのである。

前者の、「うち」を「憂し」と取る説には、「世」と「憂し」の間に主従関係を認めていると思われるものも多い。しかし、それならば助詞は主格助詞の「の」であるべきであろう。後者の、「う」を動詞の語幹とする考え方は、「世を」の文節を素直に目的格と捉えて、その後にそれを承ける動詞的な要素を捜したものであるが、これは、文を読解するにあたっての至極当然のありかたである。

そして、この和歌を読んだ当初より先験的に抱いていたという、「「うち」には地名の宇治と動詞「棄（う）つ」の連用形「うち」が掛けられており、「世をうち」は「世を棄ち」であって、世をなげうって出家することだ」との解釈を作業仮説として、舩城氏は行論を展開していくのである（舩城俊太郎「掛詞について二題―「伏し柴の　こる」と「世をうぢ山（身をうぢ川）」―」『新潟大学国語国文学会誌』四三巻、二〇〇一年）。

この新解釈のポイントは、右所引の傍線部のように、文法上のシンメトリへの洞察を前提とする点にある。舩城氏は以上の理解を踏まえ、「うち」を連用形として導き出される動詞として、「棄つ」は下二段動詞であって該当しないことから、四段動詞の「打つ」を比定し、「投げ捨てる」という意味に着目する。またさらに、「ありふればうれしき瀬にも遭ひけるを身を宇治川になげてましかば」（『源氏物語』早蕨）や「忘らるる身をうぢ橋の中たえて人も通はぬ年ぞへにける」（『古今和歌集』巻十五恋歌五・八二五）などの和歌の解釈から、宇治川と身投げのモチーフをも視野に入れ、その他関連の和歌の意味についても、分析を進めていくのである。

「世を」と叙述するのだから、続く要素は動詞（的要素を持つ語）であることが予期される。よって掛詞としては、「うち」の二字を巻き込む、動詞「うつ」を当て込みたい、というこの解釈を、舩城氏は、「喜撰法師の「うぢ山」の和歌を本歌にしたいくつかの和歌」などにも応用すべきであるとして、八の宮の和歌にも言及している（以上、舩城氏前掲論文）。

それぞれの解釈の詳細は氏の論に就かれたいが、この「を」格の理解をめぐる着想と方向性については、私も共感する部分がある[3]。ただし、和歌の本義として「世をうち」を「打ち」と「宇治」との掛詞として理解しようという結論そのものには、いささかの留保が必要だ、と考えている。それ

は、次節以降に述べる私見がより適合的な解釈である、と考えるからであるが、なにより、舩城氏自身が前掲論文の論証で述べているように、「喜撰法師の和歌に適合する「世をうつ」の例を、散文などからはなかなか見出しにくいことが問題」なの「である」。

四、「世を憂し山」と「世を倦じ山」

私は、仮名違いの「世を倦じ」との掛詞を想定するのが妥当ではないか、と考えている。こうした理解とその合理的説明は、公刊された注釈書類にはまだ確認できていないが、[6] 江戸時代の戯文的なレベルでは、もじりとして、類似説を見出すことが出来る。たとえば、

むかし、深草のさとに、世を倦じてや住家もとめて、かくれたる人ありけり。（上田秋成『癖癖談』、古典集成）

という秋成の表現は、「深草」の地が、宇治山の喜撰を幻視するような「都のたつみ」にあり、また宇治への行程裡にあったことをも想起すれば、その掛詞的表現の応用として読むこともできる。

宮このたつみは、彼宇治山の喜撰は、みやこのたつみしかぞすむと宇治山にてよめり、これは宮こにて深草の里を、都のたつみながむればといへる、心をかしくも侍るにや…（『六百番歌合』五五〇・中宮権大夫家房「あさとあけて宮このたつみながむればゆきのこずゑやふかくさのさと」に対する判詞）

いゑつね
ふかおさにおさなきちこのたてるかな
のふつな

そのかはらけのむまにくはすな

うち殿うちへおはしましけるに、せんくうをしてすこしさきたちてまかりけるに、ふかくさのまへにおさなきちこのふたつはかりありけるか、道なかにはひいてゝ、やをらたちあかりてたてりけるまへをとおるとて、かくいひたりけるを、いゑつねかはらけのむまにのりたりけるをみ返て、そのちこのまへいきすきけるとき申けるとぞ。（『俊頼髄脳』冷泉家時雨亭叢書）

次の例は、より直接的な連想例である。

世を倦山に人はすむ也……是非なく爰を立のきて。世を宇治の里にしるべあるを。幸に。しばしはかりの宿も。むきわらぶきの東や。おもしろく。朝日山にめをさまし。平等院の鐘のこゑ。聞人の哀も扇の形に取のこして…（浮世草子『好色影傚子』巻一「三　世を宇無山に人はすむ也」、元禄十一年刊、天理図書館善本叢書二五）

ただし、如上の言語遊戯を、喜撰和歌の解釈へすぐさま直接的に応用することはできない。その前提には、江戸時代にはすでに失われて問題とならなくなっていた「四つがな」（じぢずづ）の混同が存する。[7]「うち」と「うんじ」という、

撥音表記を含む仮名違いの掛詞が、中古の表現の中で成り立ちうるかどうか、ということについて、音韻史上また和歌文学史上のそれぞれの観点から、現在の研究状況を確認しておく必要があるのである。

たとえば舩城氏も、次のように前置きして「を」格の問題へと論を進めている。

特に最近は、掛詞は仮名が同一でないと成立しないという認識が明確化し、「うち（宇治）」と「うし（憂し）」とは掛けにくいことが気づかれてきた。「うち」を「憂し」とする諸注釈にも、単純にそう説明するのではなく、「宇治」の「う」を「憂」と掛詞であると説明したのちに、おもむろに「憂し」を持ち出してくるものが多くなっている。（前掲論文）

しかしこの問題については、国語の音韻論的視野のもとになされた遠藤邦基氏の一連の研究があり、傍線を付した舩城氏の指摘にも再検討が必要である。特に当該例について直接的に参照すべきは、遠藤邦基著『国語表現と音韻現象』第二章「音韻現象と掛詞修辞」（新典社、一九八九年、初出一九七二年）である。その研究は、和歌の掛詞をめぐる博引旁証の考証から、古代中世の音韻現象の解析に及ぶ国語音韻史上のすぐれた考察であるが、文学の視点からも教えられるところが多い。遠藤氏は、「ぢ」と「じ」などをめぐる四つ仮名の仮名違いについては、類音の掛詞として許容されると考えるべきだとして、結果的に「宇治」と「憂し」とが掛詞となることを主張しているのである。

同上論文では、「逢坂の関の此方は　何とかやな　君に粟津の心山科や」という『体源抄』所引の風俗歌への考察を起点に、「粟津（あはづ）」と「あはず」もしくは「あはむず」、「イツモヂ（出雲路）とイツモジ（五文字）」とが掛詞となった古例をとりあげ、「掛詞は類音をも許容し、時には音韻史の常識を破って、上代特殊仮名づかいのちがいをも意としないことさえみられるところから、「このイツモヂ―イツモジ」をもその例外としないのである」などと論じ、興味深い諸例の分析を通じて、「四つがな」の、中古における「混同のきざし」にも言及していく。

そしてさらに、「それとほぼ同様に「四つがな」の世界でも問題になりうる地名に、「淡路（アハヂ）」「宇治（ウヂ）」の二例がある」として、「淡路」については「淡路―淡シ、淡路―逢ハジの掛詞」という清濁を超えた諸例を提示して分析する。「うぢ」については、本稿で問題としている「世をうぢやま」を取り上げ、「宇治は、語頭のウだけでなくチも含めた二音節を対象とした類音表記としての掛詞であると推測する」。

遠藤氏もまた、「宇治のウだけでもって「憂シ」の意がかかりうるかどうかにいささか疑問をも」ち、「神尾暢子氏の調査」を踏まえて、「宇治―憂シと考えられる」掛詞には、「世をうぢ山」の喜撰歌の「例のほかにもう一首見出せる」

として、

わすらるる身をうぢばしの中たえて人もかよはぬ年ぞへにける（『古今集』巻十五恋五・八二五）

という和歌に着目する。仮名遣いを超えた、「宇治―憂シ」が「類音異義語」と認識され、「おそらくは掛詞として意識されたであろう」と言及するのである（同上論文）。それは形容詞「憂し」を比定する従来の掛詞を、語幹の「う」ばかりでなく、「うし」二字に及ぶものとして応用・展開された論でもあった。

教えられる所の多い高論であるが、肝心の「宇治」について、遠藤氏の推測の方向は私見とは異なっている。本稿では、遠藤氏の示した音韻的根拠に基づきつつも、先に見た「を」格のはたらきに留意し、「うぢ」と「う（ん）じ」との掛詞を想定したいのである。それは「あはづ」と「あはむず」の掛詞にも相当する言語現象ということになる。中古における「濁音の前の鼻音的要素」（遠藤邦基「清濁対応と掛詞技法」前掲書第一章所収）を考慮すれば、「う（ん）ぢ」「う（ん）じ」とも対応させることができるだろう。

「あはむず」の「む」が、省略できない文法要素の表記であるのに対して、「うん（む）じ」の「ん」や「む」は、撥音相当を無表記とすることができ、「うじ」とも表記される。たとえば『岩波古語辞典』は連用形「うじ」を立項し、『源氏物語』真木柱巻の用例を掲出している（『角川古語大辞典』にも所引）。ただし『源氏』の「倦ず」の用例では、むしろ夕霧巻の例のほうが異文の少ない「うじ」の例となっている。ここではそれを例示しよう。

このうきたる御なをそきこしめしたるへきさやうのことのおもはすなるにつけてうし給へるといはれ給はんことをおほすなりけり（夕きり、一三五四⑫）

「を」格の動詞的働きと「うぢ」と「うじ」の掛詞が、こうして結ばれてくる。遠藤氏が付加した用例の『古今集』和歌もまた「を」格を有し、「わすらるる身を倦じ」、と読んでも自然な掛詞、と理解することのできる例なのである。如上のことを踏まえて、今度は、『源氏物語』を視野に入れつつ論じてみたい。

五、八の宮の宇治

『源氏物語』橋姫において、先引の八の宮の和歌は、次のようなコンテクストで詠まれたものであった。

帝の御言伝にて、「あはれなる御住ひを、人伝に聞くこと」など聞こえたまうて、

世をいとふ心は山にかよへども八重たつ雲を君や隔つる

阿闍梨、この御使を先に立てて、かの宮に参りぬ。なのめなる際の、さるべき人の使だにまれなる山陰に、いとめづらしく、待ちよろこびたまうて、所につけたる肴な

どして、さるかたにもてはやしたまふ。御返し、

あと絶えて心すむとはなけれども世をうぢ山に宿をこそかれ

聖のかたをば卑下して聞こえなしたまへれば、なほ世に恨み残りけると、いとほしく御覧ず。

このようにそれは、彼の住まいぶりに関心を抱いた弟の冷泉院からの「世をいとふ心は山にかよへども」という和歌に対する返歌であった。それを「世をうぢ山」で受け止める贈答には、「世をいとふ山」＝「世をうぢ山」＝宇治山という対応が存する。そして八の宮の和歌はまた、「聖のかたをば卑下して聞こえなしたまへれば、なほ世に恨み残りける」想いの表出であった。「ウンズルは、自分を疎外する社会・人間関係に対して嫌悪感を抱くという意味であるとされる」（『日本国語大辞典　第二版』語誌）。「世をうぢ」と「世をう（ん）じ」が掛詞としてあるならば、それは意味的にも形式的にも、鮮やかな照合をなすのである。

自身を取り巻く政争に翻弄されて、「あいなく」「さし放たれ」、人まじらいも絶えてしまった八の宮は、最愛の妻との、「深き御契りの二つなきばかりを、憂き世のなぐさめにて、かたみにまたなく頼みかはしたまへり」。すでに「憂き世」を嘆じていた彼らには、お互いの存在こそがこの世のすべてであった。ところが八の宮は、二人目の女の子、中の君の誕生と引き替えにその妻を失い、「またこの年ごろ、かかる聖になり果てて、今は限りと、おぼし捨てたまへる世」に、「宇治といふ所」に「わたりたまふ」。「うきよぞと思ひすつれど」（『相模集』二八七）、ただしここでの「世」とは、出家しない彼にとって、あくまで「憂き世」としての〈都〉である。いささか後ろ髪を引かれつつ「思ひ捨てたまへる世」を捨てて、彼は「都のたつみ」宇治の山里に向かったのだった。

宇治といふ所に、よしある山里持たまへりけるにわたりたまふ。思ひ捨てたまへる世なれども、今はと住み離れなむをあはれにおぼさる。（橋姫）

「河霧のみやこのたつみふかければそこともみえぬ宇治の山里」という大江匡房の和歌（『堀河百首』七三八）も伝えるように、喜撰の和歌を先蹤として、彼が隠遁しようとする宇治の地は、『源氏物語』宇治十帖において本質的に重要な、「山里」という空間であった。

宇治の山里に隠棲した八宮の憂愁の思いには、

山里も同じうき世の中なれば所かへても住みうかりけり　（六帖　二　山里）

そうした山里の傷心が消化されているにちがいない。（木船氏前掲論文）

宇治の女たちに対する「山里」の意味は比較にならないほど大きい。このことは、七十六例にのぼる「山里」の用例中、実に六割強の四十九例が宇治十帖に集中するという用例の分布からも予想されることであるが、もとよ

り問題は量の大きさのみにあるのではない。（中略）大君、浮舟にとって「山里」は終生離れることができなかった場所であり、そのような「山里」を離れられない「女」を主役に据えたのが宇治十帖の物語なのであった。（今西祐一郎「山里」『国文学　解釈と教材の研究』二八巻一六号、一九八三年一二月号）

世をのがれ、山里へ隠れ住むこと、まさにそうした文脈に、動詞「倦ず」が用いられる。

あてなる女の、尼になりて、世の中を思ひうんじて、京にもあらず、はるかなる山里にすみけり。もとしぞくなりければ、よみてやりける。

そむくとて雲には乗らぬものなれど世のうきことぞよそになるてふ（『伊勢物語』一〇二段、新編全集）

世の中をうんじて筑紫へ下りける人、女のもとにおこせたりける。

忘るやといでて来しかどいづくにもうさはなれぬものにぞありける（『大和物語』五九段、新編全集）

（季明は、弟の右のおとど正頼に）「（前略）折あらば、これ（＝実忠）顧みさせたまへ。世の中思ひ捨てて侍れど、これいたづらになしたまふな」と、泣く泣く聞こえたまふ。右のおとど、「（中略）年ごろ、むかしより、いかで心ざし深くとは、この君をこそ思ひ聞えしか。また侍る所にものしたまひしかば、あはれにむつましき者に思ひきこえしかども、あやしう、年ごろ山里に籠りものしたまふらんは、世の中に倦じたまふことやあらむ。なでふ御心ありてか、など思ひたまふるを。先つ年ごろ、侍る所にこれかれものしたまふこと侍るとか。（下略）（『うつほ物語』国譲上、新編全集）

八の宮もまた、右の『伊勢』や『大和』の詞を借りて言えば、「世の中をうんじて」、「京にもあらず、はるかなる山里」の「宇治」に「すみけり」という境遇であった。「を」格に対応させ、動詞「倦ず」を比定すれば、世を厭い雛に下った、そうそしる人を恨む喜撰の和歌のイメージと、世を厭い宇治へ下った過程が物語に描かれる八の宮の心境とは、より的確に対応する。こうして、舩城氏が「憂し」説に対して示した問題点として、「真淵がしているように「世を憂く思い悟って逃れ住む」などとすれば、歌意は通ずるが、それではまわりくどすぎる」、とした解釈の難点はむしろ積極的に解消されるのである。また逆に、舩城氏の対案である「投げ捨てる」説には、如上の世を厭い宇治へ下る、というイメージは導き出せないのではないだろうか。

六、宇治と憂し、そして倦じをめぐる

ところで「うんず」とは、「「倦（う）みす」あるいは「鬱（うつ）す」また「憂（う）みす」の変化したものという」（『日本国語大辞典　第二版』）。確かに、先引の『伊勢』も『大

和』も、「倦じ」に続いて「世の憂きこと」「憂さ（宇佐と掛詞）」が登場する（波線部）。そしてこれまで見てきたように、橋姫巻には「語脈」（萩原広道『源氏物語評釈』夕顔）のように、「山里」とともに、「憂し」という語が散見していた。少し付加すれば、次の如くである。

のちに生まれたまひし君をば、さぶらふ人々も「いでや、をりふし心憂く」などうちつぶやきて、

いかでかく巣立ちけるぞと思ふにもうき水鳥の契りをぞ知る（大君の和歌。「「う（浮）き」に「憂き」をかけ」（全集頭注）、「「憂き水鳥」に「憂き身」を読み込む」（古典集成頭注））

そして舩城氏も示すように、「実際、「宇治」の「う」を「憂し」の「う」に掛けていると思われる和歌も」『源氏物語』の中に「存する」。それはやはり宇治十帖、浮舟巻にある。

里の名を我が身に知れば山城の宇治のわたりぞいとど住み憂き[9]

「倦じ」と「憂し」と。それは喜撰の和歌でも「を」格を発条として呼応し、連続し合うかのようだ。その発想を導く「を」格への着目は、舩城氏も注に引用する例だが、賀茂真淵『宇比麻奈備』に見出される。

是はわれ世の中をうしと思ふ故に、のがれ来てこゝに住めり。即こゝを世をうぢ山と人のいふぞといへり、或人平安城の巽なる宇治山に、幽居の意を得て、如是住てあり、然るに猶此山を名づけて、世をうき山と世の人はいふなり、名のみして、かくうき事はあらぬものをとよめるといひつるを、荷田在満いはく、世の人のうきといふ山を、世をうぢ山といふべしや、をの助辞さては聞えがたく侍る也、此世をうしと思ふは喜撰がこゝろ、それ故に山へ入たり、さてその山をうぢ山といへば、直に名をいひたるにて、只その居所をことわれるのみの歌なるべし、人はといふはのことばにつよく泥むべからず。世をうしといふより、人のうぢ山といふにつづけたるなど、古今の序にいへる、始終たしかならぬすがた成べしと、世をのをの事中ごろの世の歌に、よの中をうしとやさしと、身をうぢはし、身をうき草などのつゞけのみあれば、此論よろしき也、（賀茂真淵『宇比麻奈備』上・喜撰法師、『賀茂真淵全集』）

「世を」の「を」格に注目し、「憂し」を活かして解釈すれば、それはまさに「われ世の中をうしと思ふ故に」のように「思ふ故に」を補読した形を取らざるを得ない[10]。そのかたちなら、右にも一部引かれるように、古くより用例を検することができる。いずれも「世を憂く思い悟って逃れ住む」ことを示唆する用例である。

世の中を憂しと（世間乎宇之等）やさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば（『万葉集』巻五、八九三、山上憶良）

むかし、男女、いとかしこく思ひかはして、こと心なかりけり。さるを、いかなることかありけむ、いささかなることにつけて、世の中を憂しと思ひて、いでていなむと思ひて…（『伊勢物語』二一段）

それはまさに、「倦ず」という一語に本然的に内包されていた意味世界である。そのことを象徴するのが、次の『万葉集』の古い用例である。

世の中を憂しと思ひて（世間乎倦迹思而）家出せし我や何にかかへりてならむ（『万葉集』巻十三、三二六五）

この和歌の「「憂し」の原文「倦」、名義抄に「ウム・モノウシ・ツカル」などの訓がある」（新大系脚注）。その「原文「倦」は「懈」（二八七二）に同じ」（新編全集頭注）。

逢はなくも憂しと思へば（懈常念者）いやましに人言繁く聞こえ来るかも（同巻十二、二八七二）

「「憂し」は心のふさいだ状態。原文「懈」は巻十二にだけ見える文字」（新大系脚注）で、「『一切経音義』巻二十七の『玉篇』佚文に「倦也、怠也」とあり」（全集頭注）、「名義抄の同字に「モノウシ」、「倦」に「ウム・ウミ」の訓が見える」（新大系脚注）。

二八七二・三二六五の両歌に共通する「世間」という語とも相俟って、〈世の中を憂しと思う〉『万葉集』の歌境に既に、仏教的な遁世のイメージが潜在する。まさしく文字としての「倦」は、意味に於いて「憂し」であり、訓として「うむ」を含み、そしていずれかの派生語「うんず」と語義的に対応する。憂しと倦じとは、文字をも含めて、形容詞と動詞と、それぞれの領域に応じてはたらきつつ、極めて近い類義語であった。

こうして、解釈上の立場として「世を宇治山」には「世を倦じ山」が掛けられている、と読む。そして和歌の表記であるから撥音と濁音とが捨象され、後者は「よをうしやま」という表記形式に収斂されて理解される。結句それは、遠藤氏が示して見せた、「世を憂し山」という解釈と同一形式に重なっていく。「世を倦じ山」という理解とともに、そのこともまた、相応に重要であった。

というのは、「動詞的な要素」を凝縮した語として、「憂しと思ふ」＝「倦ず」は、あたかも可逆的に相即するからである。物語世界の語脈としての「憂し」と、八の宮の行為としての「倦じ」とは、かくして一体的にあの和歌を表象するだろう。喜撰の和歌は『古今和歌集』巻十八雑下に所収される。この巻には「世中のうさ」（九三五）、「あなう世中」（九三六）、「世中のうきもつらきも」（九四一）、「世のうき」（九五二）、「よのうきめ見えぬ山ぢへいらむ」（九五五）、「うき世中」（九五三）などの類句に満ちつつ、九四九番歌以下九五六番歌あたりまで、世を遁れ山に入ることをテーマにする和歌が続く。そして、冷泉院との和歌と同じ「世をばいとはむ」（そせい、九四七）、「世の中をいとふ山べ」（九四九）という表現や、

山里は物のわびしき事こそあれ世のうきよりはすみよかりけり（九四四）

白雲のたえずたなびく岑にだにすめばすみぬる世にこそありけれ（九四五）

という連続[11]、また、

山のほうしのもとへつかはしける　凡河内みつね

世をすてて山にいる人山にても猶うき時はいづちゆくらむ（九五六）

という和歌など、あたかも八の宮との贈答歌の境地を詠んだような歌が散見するのである。当時の『古今集』享受の濃度（たとえば著名な『枕草子』の逸話）を考えれば、如上の歌群を前提に喜撰歌と八の宮歌とを捉える必要がある。そして、「宇治は院政期に入ったころから、かつて喜撰法師がうたったように「世をうし山」―「憂し宇治」といった雰囲気がつよくなってくる」（『宇治市史』1・第3章）。喜撰歌の解釈にも、そのことはしかるべく還元されてくるだろう。[12]

七、うぢのはちのみやとうだのはちのみや

しかし、そうした和歌の本義とは別に、本論第二章に戻れば、舩城氏が自然な読後感として述べていたように、言語遊戯を内在するこの「世をうぢ山」の句が、「世を」に対して「うぢ」という語が動詞的に作用するという認識を、読者に抱かせるものであったという点は依然重要である。[13]たとえばこれまで読者は、いささかの違和感を抱きつつも、この句について「世をう」までの掛詞として享受してきた。「そうなると、格助詞「を」の存在がますます気になってくるから、自然「う」を動詞的に考えることも起こってくる」（舩城氏前掲論文）のである。そして舩城氏のように、「世をうぢ」の「うぢ（うち）」を動詞的に認識することによって、「うた」もしくは「うだ」という活用形式が仮設的に想定され、[14]「うだ」と「うぢ」とを同一語的に連想付ける。動詞でなくてもよい。名詞としての「うぢ」と「うだ」とは、あたかも被覆形と露出形との関係のように、両語が結局は一語であるかのように読者に印象させなかっただろうか。[15]喜撰法師の歌を用いて宇治八の宮の造型の一端を推し進めた『源氏物語』においては、「うだ八の宮」と「うぢ八の宮」の類似性は、もはや単なる類音ではない。文法的連鎖への認識を基底に、言語遊戯としてたやすく結ばれ、敦実親王准拠説に一つの理解と連合の場を提供する。宇治八の宮は言語の上でも、宇多八の宮のアヴァターラ（化身）のように、読者の前に幻想的に浮かび上がる…。[16]

右の最後の解釈は、すでに読書の多様性、読者の恣意性の領域に踏み込んだ理解となっているかも知れない。その普遍性を強調するつもりはない。ここでは、喜撰法師の和歌の再解釈とともに、宇多八の宮敦実と宇治八の宮との准拠的連合の一面が、言語的に傍証できればそれでよい。

注

(1)拙稿「心に思うままを書く草子―徒然草への途―」(上)(下)(『国語国文』五八巻一一、一二号、一九八九年一一、一二月)や「源信の母、姉、妹―源氏物語「横川の僧都」と源信外伝成立をめぐって―」(『国語国文』六五巻四号、一九九六年四月)など。

(2)拙稿「玄宗・楊貴妃・安禄山と桐壺帝・藤壺・光源氏の寓意―続古事談から見る源氏物語―」(『詞林』三六、二〇〇四年一〇月)、「武恵妃と桐壺更衣、楊貴妃と藤壺―『源氏物語』桐壺巻の准拠の仕組みをめぐって―」(『語文』八四・八五輯、二〇〇六年三月)、「〈北山のなにがし寺〉再読―『源氏物語』若紫巻の旅―」(『説話論集』第一七集、二〇〇八年五月)、「「胡旋女」の寓意―『源氏物語』の青海波をめぐって―」(『白居易研究年報』第九号、二〇〇八年九月)。

(3)国文学研究資料館・大阪大学大学院文学研究科共催「国際日本文学共同研究集会　国際的相関研究のありかとゆくえ」(二〇〇七年三月四日於大阪国際会議場グランキューブ大阪)のSession I:そばみたる『源氏物語』―Genjimonogatari in Profileにおいて、「宇治八の宮再読」として口頭発表し、その後その一部を改訂し、「『源氏物語』宇治八の宮再読―敦実親王准拠説とその意義―」(『国語国文』七八巻三号、二〇〇九年三月)と題して文章化した。

(4)「宇治」と「憂し」との掛詞、ということをややルーズに説く書もあるが、一般書に及ぶまで、基本的にはこの理解が一般的なものである。神作光一編『八代集掛詞一覧』(風間書房、二〇〇二年)では「う」の項に「【宇治(地名)・憂】」として、当該『古今集』歌ほかを挙げる。『百人一首』諸注の便覧には、島津忠夫・上條彰次『百人一首古注抄』(和泉書院)、加藤磐斎『百人一首増註』(八坂書房)、神作光一「古注・新注数種対照　小倉百人一首演習ノート(46)―(八)喜撰法師―」(『吉海直人編『百人一首研究資料集』第三巻・注釈二、クレス出版、二〇〇四年、初出一九七四年)を基礎資料として、管見の関連注釈書を参照した。

(5)注(2)所掲の口頭発表の段階では舩城氏の論文を未知・未読であったが、「を」格と動詞性について、関連する問いかけを行った。

(6)ネット上では、山戸朋盟(竹男)氏の「朋盟のホームページ」http://www2u.biglobe.ne.jp/~houmei/index.html の中の、「箏曲歌詞解説」において、「茶の湯音頭」の同歌相当部分について、「宇治」に「倦じ」を宛て、「倦じ「倦(う)ず」(厭だと思う)というサ変複合動詞の連用形。「宇治」と「倦じ」が掛詞。「宇治」と「憂し」の掛詞という説明もある。」と注記される例があったが、具体的な記述はそれ以上誌されない。同歌詞解説は、「私の和歌表現に対する独自の理解の表れと」して示されたものという。

(7)CD-ROM版新編国歌大観の『秀歌大体』一〇七は、「我がいほは都のたつみしかぞすむ世をうじ山と人はいふなり」と翻刻し、検索も同様であるが、底本を等しくするはずの活字版は「うぢ山」とする。その錯誤のレベルはともかくとして、同音となった「ぢ」と「じ」を前にすれば、両語が混同されるのはむしろ自然である。なお「うんじ」は、撥音を含むためか、また文体的な問題もあるのか、歌語としての用例を知らないので、ご教示を乞う。

(8)引用は『源氏物語大成』であるが、便宜上、同書の校異を参照すれば、【青表紙本】うし―うんし肖、【河内本】異文なし、【別

本】うし―そむし御―そむき保―そし国となり、「ふすへられける程あらはに人もうし給ぬへけれはぬきかへて」とある（まきはしら、九四八⑤）のほうは、【青表紙本】うし給ぬへけれは―み。うし給ぬへけれは為―そ（御らん）したまひぬへけれは池、【河内本】うし―みうむし河、【別本】うし―みうんし保―御覧し長―うとみ麦阿、となる。

(9)「経厚抄」が喜撰歌を「世憂山と人はきらへども」、「天理本聞書」が「山の名が宇治なれば世を憂とて」とするが如く、「宇」と「憂」の語頭掛詞であるとともに、脚韻（＝イ）の類音性を基軸に、「うぢ」と「うき」を掛けて理解することもできる。

(10)この補読が「故に」という原因・理由を付随することには、形容詞語幹に「を」が前置して原因・理由を示す、ミ語法の古い形式への記憶が背景に存すると見てよいであろう。

(11)この両歌「山里」「世のうさ」「すみよかり」を「すめばすみぬる世」につなぎ、憂き宇治の山里に「すみ」（住み・澄み）という歌意を八の宮の和歌にもたらしたのだとしたら、後者の作者が八の宮准拠説の一人に数え上げられる惟喬であることにも、あらためて興味深い意味が生じるかも知れない。

(12)井上宗雄『百人一首　王朝和歌から中世和歌へ』（笠間書院・古典ルネッサンス、二〇〇四年）に、喜撰歌の注解として『宇治市史』のこの叙述への言及がある。

(13)なお真淵が「を」格の例として挙げる「わびぬれば身をうき草のねをたえてさそふ水あらばいなむとぞ思ふ」（『古今和歌集』序、巻十八雑歌下・九三八）は、後述するように喜撰歌が所収される巻十八にある点で重要であり、「しかすがにかなしきものはよのなかをうきたつほどのこころなりけり」（『後拾遺和歌集』一〇二一、馬内侍）という和歌とともに、「浮き」と「憂き」が掛けられていることも留意される。この掛詞を介在させれば、注（9）のような理解を併せて、「うき」にはこの形で動詞的なはたらきをも想定できるからである。だがそれは当該喜撰歌及び八の宮歌で問題となる「うし（じ）」「うち（ぢ）」という二音の類音を有せず、なにより「浮き」という語彙が両歌の意味世界と重ならない。ただし、本文に引用した『源氏』夕霧巻の「倦じ（うし）」の例の文脈が、「うきたる御な」と「うき」を前置することなど、どこかで通じる部分はある。いまは参考としておく。

(14)注（9）や（13）に掲げたような解釈を参照すると、「うだ」と「うぢ」の二音節に掛詞的な類音関係を見ること自体、実はさほど特別な解釈的過程を経るものではないが、ここではあくまでそう想定されるプロセス―言語遊戯としての仮想的活用―が重要なのであり、「うた」はともかく、「うだ」などという形の未然形を有する動詞が存在するのかどうかは問題ではない。

(15)いわずもがなではあるが、サケ・サカを「酒」、タケ・タカを「竹」として、母音の相違に拘わらず同語であるとするような認識行為を想定すればよい。それはいわば名詞の活用（川端善明『活用の研究』参照）の如く―もちろん私がここでいうのは、比喩的な、類推的なレベルで、であるが―、注（14）に述べたことと表裏の関係になる。なお遠藤氏前掲書の掛詞認定は、上代特殊仮名遣いに関しても試みられている。

(16)二人はともに「八の宮」と呼ばれるが、「宇多八の宮」という連語は同時代文献には見えず、「宇治八の宮」という呼称は、物語本文の中では、国冬本紅梅巻の異文の中に「うちのはみや」という形でのみ現れる。敦実については、『亭子院歌合』に「八宮」

と現れて〈宇多の八の宮〉と解釈される（注（3）所掲「『源氏物語』宇治八の宮再読―敦実親王准拠説とその意義―」参照）。「うだ」も「うぢ」も、後人の呼称として存在する形容である点も共通する。

［付記］引用原文の依拠本文は、原則として本文中に示したが、その他の歌書は、新編国歌大観に依る。なお引用に際して、表記等を変更したり、ふりがなを省略するなど、私にあらためた部分がある。

（あらき・ひろし　本学大学院教授）